

五月五日の節供の粽(たまき)を供えるが、後で中のもちを食べて粽の皮(ヨシノ葉)だけをいつか供えておいて、雷鳴のほけしい時に、これを火鉢で焚けば落雷しないといわれている。
夏には霊作を祈って早苗を供える。又秋には総りの良い稲穂をささげて感謝する。

荒神 柵

御社 木造 一社

三宝大荒神 坐像(十四粒)を祀る

御札

南無三寶

陸奥前之
陸奥前之
陸奥前之

奉鎮 寔戸大神 天正火守天正香山月
火止堂令給市政
七全

三賢大荒神

土間を奥にはいると別棟になつて炊事場で、水神様と
荒神様が祀へてある

水神様には毎朝御飯とお茶湯を供える。

水神 社 (炊事場内)

水神社 一基

徳高 五〇粒 焚灰岩の石祠

上部は屋根型 文字なし 建立年次不詳

荒神様

荒神様 (炊事場内)
木造の祠の中に、高さ十程ほどの荒神像を
一体祀つてある。

御札

三賢 踏原森陰
大荒神

主家に残いて鍵の手の板屋があるが、その中央部に牛
と二頭二つの部屋に飼つてゐる。いあゆる牛納屋で、そ
の入口正面上部に次のようなお札が貼つてある。

御札

愛宕將軍建命地藏菩薩(下に大きな牛の絵)

馬頭観音

牛馬(馬の絵)守護
西野野山
奉給與之院

馬鎮神社守奉給彼

石鉈神社牛馬守護

(住所 南海郡麻生町字横原)

現地踏査記

高崎山城址をたずねて

— 五月・史談会現地研修会の記 —

会員 小野 菜 治

高崎山城といつても、現在一般の人は、さて、どこに
あつた城かならう。ぐらゐにしか思わぬまいようである。

もつとも高崎山の嶽といえは有名で、只今では大分市
最大の観光資源として、近年急にクローズアップされ、
サル見物の観光客の多いのには驚かされませう。

しかし、この高崎もかつてはサルよりも、城郭として
有名でした。平安時代の末に安倍宗任が築城していたと
か、又鎌倉時代の初、大友氏の入国に際し、阿南惟家が
この山に籠り、大友氏に反抗した等の歴史的な伝説があ
り、其の後は大友氏の主要な山城として、正平十三年(

一三五八年）大友氏時集城以來、度々合戦の経験を經て、文祿二年（一五九三年）大友氏の除國により廢城となつてゐる等、これらの物語はよく聞き、この山も亦よく望むのであるが、私はまだ、この山城を踏査した事がなかつた。

昨年、佐伯史談会の年市集會の折、高崎山登山を來年ぜひ実施しようではないか、と話題になり、樂しみにしてゐた。なにしろ多數の猿が棲息してゐる山であり、かつ道案内がなければ、一人で登山するのが不手に思へてゐたのである。

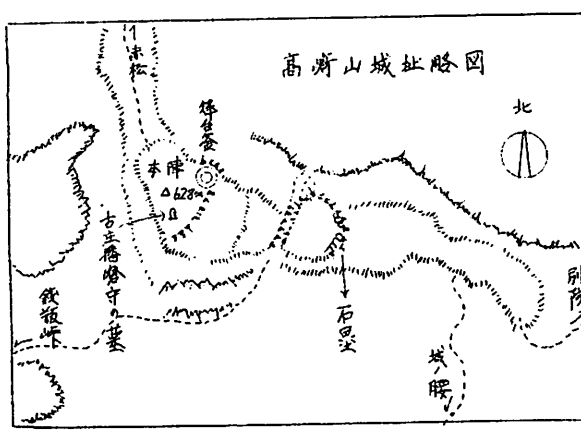
そして四月二十五日、日曜日、やつと実施という事になつた。大分市のトキハデパート前に九時集會としてゐたが、おいにくとこの日は統一地方選挙の日である。集まりが悪く、九時半頃までに集會したのは、高木會長、沢崎先生、市野瀬先生、吉藤田會員と私の五人に、大分の「歩こう會」から立川先生、川崎氏が案内といふことと合せて総勢七人、まずまずの人数である。

電車でカンタンまで行き、それより旧官道、旅原八幡の参道を登つていつたのであるが、ハイキングには最適のコースで、見晴らしよく、天気よく、話かはずむ。一時道に迷つたりし友が、たいしたことなかつた。しかし案内に遠く、時間がかかり、山頂で中食の予定が、山腹で中食ということになり、ほろかに高く、海拔六二八米の山頂を望んで、さすがに疲労を覚えたものであつた。やがて、城ノ腰に至る。農家一戸残り、なんでも往時は城番屋敷があつたと伝えられてゐる。なおしばらく登れば、焼の墓と伝えられる石碑が見られる。真疑のほどはともかくとして、その昔、毎日頂上まで三石三斗の水を運んでゐた姥が、敵兵に発見されて殺されたとか、異説には、一日端午の節供に休んだことから城主の怒りを甯い、斬殺された水運びの姥の伝説がある。

これより一本道といふことで、立川先生はここに降り、なおも頂上めがけて進む。途中には崩れかけた石壁が所々に見られる。小型の万里の長城を思わせるような長く続くものもある。当時の山城の遺構として貴重なもので犬吠興味深い。

やがて頂上に至る。山頂には土壘、それも石こ土を混合したものか、高さ一米余で延々と続き残つてゐるものが素晴らしい。本陣と称される最高所まで緩傾斜で上つてゐる道は、空城を兼ねた通路となつてゐる。概して東西に長く南北に短かく、西に高く東に低くなつてゐる。

この頂上附近には、段々に曲輪の址、空堀の深いもの一部に石壁も目につく。なお、東西土壘で囲まれた内陣の長さは、五百米にも及んでゐる。なお南北で最も巾の広い地は、本陣で八十米程あり、平坦な広場となり、枳樹が、かにも古城らしい風情とくましく出でゐる。



本陣の東北隅に當つて、内徑四米程の烽火臺なる石積のものがあり注目される。一説は大友氏時代のもので及なく、幕末府内藩が外国船警備のために築いたものでないかとされてゐるが、珍らしい遺構である。

山頂よりの展望は、実に素晴らしいものがある。その水も海側は樹木にさえかられてあまり見えないうが、別府方面、大分市の

奥あたりはよく見える。大友氏も歴代この展望を樂しむ軍事的にも大いに利用した事であろう。

さて、一驚いた事は、城址一帯がよく整備されていゝることである。これらどうも数千石といわれるサル群が遊ぶために自然こうなつたらしいが、高崎山でなくては他では古よつと見られないことであらう。

短時間で附近を踏査してみたが、杉の造林されている所には、水ガメの破片なども見られて、籠城の往時が思はれて興味深いものであつた。やはり軍記物語の範圍を出るには、實地に踏査することである。そこから新しい視野が開けるものだと思つた。

帰りは錢瓶峠を経て、バスで別府に下つたが、もちろん初めての道であるだけに、たのしいものであつた。特に錢瓶峠附近に残る江戸時代の道標、歩こゝ会で発見復元したという、旧官道の道標等貴重なもので、いゝままで大切に保存したいものである。

高崎山城址を踏査して見て、一言づいえば、さすがに大友氏の城といえるだけに、規模雄大な山城である。しかし伝説にもあるとおり、水に乏しいという弱点が惜しまれる。要害からいへば一級で、官道をおさえた要点に築かれた城という点からも注目されよう。もちろんだ当時は、別大国道等なく、海側の道は、道ろしい道とてなかつたのであつた。

大友氏の時代に築かれた、大友氏歴代の城、それは中に於ける豊後を代表する山城でもあつた。高崎山城とはそんな城である。この貴重な城址を、ぜひ大切に保存し、後世に伝えたいものである。

〔参考文獻鈔〕

南北朝の戦亂に、高崎山が大友氏の城址として、花々しい後刻

を占めるようになる以前に於いて、稍著名な歴史的伝説が二つある。

その一は平安末期に安倍宗任が豊後に來着し、この山に築城して友といふこと。その二は鎌倉時代の初、大友氏の入國の時、阿南惟家が此の山に居つて、大友氏に反抗したといふことである。伊忠元春太宰府管下の峰越や防人には、東國の武人を派遣するのが慣例であり、延喜式の時代には、九州各地に陸奥のアイヌ系が表傳が配置され、其の數もかなり多かつたことと史上に明らかなる。伊豆長安部頼時の子たる貞任が、降伏後に豊後に配置されたといふは、決して有り得ぬことではない。一甲斐一宗任が居ると高崎山麓に構えたといふのは、一朝事お成、この險難の地に投りんと心構えからであらうか。要所に柵位は設けたかも知れない。後世のような嚴重な城ではあるまいが、とにかく宗任が高崎山に築城したといふ語は真向うか否か、認し去ることも出来ない。

又阿南惟家の陣所といふ話は、建文年間は大友能直が豊後守護となつて入國した時、備方一族が之に反抗した。能直の先鋒古庄重吉が之と平定したといふ。此の時阿南惟家が、高崎山に陣を構えたことが「増補大友興廢記」に見える。同書卷二「大友能直豊後下向之事」の條に、

爰に備方三郎惟栄が一門大野九郎泰基並阿南次郎惟家は、おめおめと守護に依はんも惜しとて、惟家は、大分郡高崎山に陣を取り、軍教度々に及びしかと終に打負け、惟家は白嶺權現の鳥居の前へ矢に当り死す云云とある。併し其の遺跡など今は探るよすがは無い。又「興廢記」そのものが後世の俗書であるから、勿論此の事も果してかかる有様であつたかは断言出来ない。

正確な史書に高崎山の現れ出る方は、次の南北朝以後で、勿論大友氏を中心となつてゐるから、恰も大友氏興亡史そのものを語る様な有様ともなるのである。(後略)

(豊後古蹟研究一柳実徳研究会による)